



公益財団法人 京都新聞社会福祉事業団 活動パンフレット



2026年5月



京都新聞社会福祉事業団の活動

京都新聞社会福祉事業団は、1965年（昭和40年）、京都府・滋賀県における地域福祉の発展に寄与することを目的として、京都新聞社が取り組んできた社会福祉事業を統合し、財団法人として発足しました。

皆さまからお寄せいただいた温かいご寄付は、当事業団の福祉活動を通じて、京都府・滋賀県の地域福祉を支える大きな力となっております。

さまざまな事情により学費の捻出が困難な生徒・学生を支援する「愛の奨学金事業」、障害のある方の自立や社会参加を応援する「障害のある人のための事業」、高齢者の生きがいづくりを支援する「高齢者のための事業」、子どもたちの健やかな成長と明るい未来を支える「子どもたちのための事業」、子育てに悩む母親を支援する「子育て応援事業」、福祉団体・施設などの活動を支援する「福祉活動支援事業」など、地域に根ざした幅広い福祉活動に大切に活用させていただいております。

皆さまのご厚意を心より感謝申し上げますとともに、今後も「ともに生きる」社会の実現を目指し、より一層、地域福祉の充実に努めてまいります。

1 奨学金 2～3頁	2 障害者 4～9頁	3 高齢者 10～11頁	4 子ども 12～13頁	5 子育て 14～15頁	6 福祉活動 支援 16～17頁	7 顕彰 18～19頁
------------------	------------------	--------------------	--------------------	--------------------	---------------------------	-------------------

1

奨学金



◆京都新聞愛の奨学金（贈呈式7月）..... 2～3頁

京都、滋賀に在住する高校生、大学生、専門学校生らを対象に、返済不要の奨学金を支給しています。本事業は、家庭の経済事情などにより学費の捻出が困難な生徒・学生を支援するために、当事業団の発足以来、62年にわたり継続しているものです。

●奨学金は、以下の4つの部門で支給しています。

- ①一般の部（公募） ②交通遺児の部（公募）
- ③定時制・通信制高校生の部（公立高校から推薦）
- ④児童養護施設の高校生への奨学激励金

●支給額は、高校生一人あたり年額9万円、大学生・専門学校生には年額18万円を支給。児童養護施設（京都・滋賀の17施設）に在籍する高校生には奨学激励金として3万円を支給しています。

●2025年度の支給実績

- ①一般の部：209人（計2,808万円） ②交通遺児の部：10人（計162万円）
- ③定時制・通信制高校生の部：11人（計99万円）
- ④児童養護施設の高校生への奨学激励金：141人（計423万円）

合計371人に対し、総額3,492万円を支給しました。

児童養護施設の高校生への奨学激励金（2025年7月28日付 京都新聞朝刊）

京都府、滋賀県にある全ての児童養護施設で暮らす高校生を対象にした京都新聞社会福祉事業団の「奨学激励金」贈呈式が今月5日、京都市中京区の京都新聞社で行われた。「愛の奨学金」他部門受給者と申請者のいない1施設を除く16施設の高校生141人分総額423万円が贈られた。市民や企業、団体などからの「児童養護施設・乳児院等の子どもたちのための寄付」を基に1人3万円を贈っている。

贈呈式には今回初めて、代表生徒が各施設から施設長らとともに出席し、激励金が白石真古人常務理事から直接手渡された＝写真。

白石常務理事は、寄付者からの思いをまとめた応援メッセージを伝え

奨学激励金423万円贈呈

京滋の児童養護施設高校生へ



激励した。同事業団では、奨学生の感謝の気持ちや施設からの寄せ書きなどを寄付者側に伝えており、「寄付者の思いが生徒たちに届き、生徒たちの健やかな成長がまた新たな善意の寄付を生む『思いの循環』が生まれることを通じ、持続可能な福祉社会の形成に貢献していきたい」と合わせて伝えた。出席した施設長らは「寄付者の皆さんの応援が生徒らにも伝わったと思う」と話していた。



2025年度 京都新聞 愛の奨学金 贈呈式

(2025年7月22日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆ 京都新聞「愛の奨学金」贈呈式 ◆

都新聞社で行われ、物価高騰の厳しい経済状況下、将来への目標と希望を抱いて学ぶ京都府・滋賀県内の学生・生徒計371人に総額3492万円が贈られた。奨学激励金も同日、16児童養護施設の高校生141人が代表生徒らに初めて直接手渡された。

奨学金の内訳は、公募一般の部で高校生106人、大学生・専門学校生103人、交通遺児の部で高校生2人と大学生・専門学校生8人、公立高が推薦した定時制・通信制の部で11人。

公募による一般の部の申請には高校生207人と大学生・専門学校生192人計399人があり、ひとり親家庭が半数を超えた。

大藪俊志・佛教大教授、石川絢嗣・京都青年会議所理事長、横江美佐子・京都市南青少年活動センター所長の選考委員3人が、成績や作文などで将来への思いや現在の学業に対する意欲をくみ選んだ。

贈呈式は3回に分けて開かれ、白石真古人常務理事と寄付者代表らが代表生徒に奨学金を手渡した。常務理事は奨学金の趣旨や選考の経過などを説明。多くの寄付者からの言葉も引用し、「その思いを胸に、夢や目標に向かって歩

371人に3492万円 奨学生に直接手渡し

んでください」と話した。

大藪選考委員長は「多くの善意に支えられた奨学金を有意義に活用してください」と横江委員は「これから先も厳しい状況に直面した時には助けを求めてほしい。助けを求められる人は人を助けられる人、人に手を差し伸べられる人だから」と激励した。

奨学生を代表して2人の学生が謝辞を述べた。京都市立芸術大の安原添菜さんは「音楽を通して世界中の人に勇気や希望を届けられる歌手」を目指して音楽を学んでいる。「さまざまなことに挑戦し、何事にも全力で取り組みたい」とボランティア活動にも励み、昨年は「平和を考える」チャリティーコンサートを開催。京都市在住の



代表生徒に奨学金を手渡し
白石真古人常務理事

ウクライナの人たちに募金を届け感謝された。今秋には交換留学で英国に渡る予定で、奨学金はその準備の一部にも活用するつもりで「支えてくださる皆さまへの感謝を胸に日々精進してまいります」と結んだ。

舞鶴市出身の高梨力麻さんは、京都市内で一人暮らし。中小企業の支援を行いたい気持ちから税理士を目指して龍谷大で学んでいる。経済的な事情などで通信制高校、短大、4年生大学への編入を経験しており、「皆さんがそれぞれの事情がある中で頑張っていることを、本奨学金の報告で知ることができた。私とは違う境遇に立つ皆さんだと思いますが、私も負けずに頑張ろうと思います」と話し、感謝の思いを伝えた。

同奨学金は、事業団が発足した1965年以来続いている。高校生は年額9万円、大学生・専門学校生は同18万円が返済不要で給付される。奨学激励金は一人3万円が贈られた。(ライター 山本雅章)

「感謝胸に音楽の道精進」

「苦境に負けず頑張る」



謝辞を述べた安原添菜さんと高梨力麻さん(いずれも5日、京都市中京区)

京都新聞社会福祉事業団の2025年度「京都新聞愛の奨学金」贈呈式が5日、京都市中京区の京



◆障害のある人のための事業

障害のある方々が社会の一員として自立し、豊かな生活を送るためには、就労支援や文化・スポーツ活動の機会を広げることが重要です。当事業団では、障害のある人の社会参加を促進し、生活の質の向上を図るため、就労支援、体験活動、スポーツ、芸術文化など多岐にわたる事業を展開しています。

◇助成事業

「京都新聞夏季キャンプ・レク活動を応援」助成（6～9月）

障害者団体や支援グループなどが実施する宿泊を伴う、夏季のレクリエーション活動を助成

◇催 事

「京都手話フェスティバル」（2月） 5頁

手話の普及と発展を目的に、手話スピーチコンテストや手話アトラクションを実施

シンポジウム「障害のある人の就労支援」（2月） 6頁

障害のある人の就労支援について考えるシンポジウム

「みんなで海釣り-障害のある人の体験講座」 7頁

（9月／1泊2日・宮津市 京都府立海洋高等学校 棧橋）

障害のある人の余暇活動の支援をする1泊2日の海釣り体験講座を実施

「京都新聞おでかけ公演・障害者団体」（3月で2カ所） 11頁

障害者施設に演奏家を派遣する出張型公演事業 障害者施設と高齢者施設で開催

◇障害者スポーツ事業 障害のある方々が参加できる多彩なスポーツ事業に取り組んでいます

全京都障害者総合スポーツ大会（6～10月／京都府内各地） 8頁

7競技（卓球バレー・卓球・水泳・陸上競技・アーチェリー・フライングディスク・ボッチャ）を実施

天皇杯 全国車いす駅伝競走大会（3月／国立京都国際会館前-たけびしスタジアム京都）

全国の車いすアスリートが集結する全国規模の駅伝大会

京都ゆとりスポーツの集い（10月／京都市障害者スポーツセンター） 9頁

京都府内の精神科病院やクリニックの患者同士がバドミントン、モルック、スクエアボッチャ、卓球を通じて、交流を図る大会

パラアーティスティックスイミングフェスティバル 9頁

（10月／京都市障害者スポーツセンター）

障害の有無に関わらず、ともにASを通じて交流し、技術の向上を目指す大会 など

京都手話フェスティバル

(2026年3月22日付 京都新聞朝刊)

手話 感情豊かに

中京でフェス 交流のエピソード披露

手話の普及と発展を図る「第21回京都手話フェスティバル」が21日、京都市中京区のハ



最優秀賞を受賞した西村さん(左)＝京都市中京区・ハートピア京都

ートピア京都で開かれた。出場者は手話を学んで披露した。

2月8日に予定されていたが、大雪の影響で延期となっていた。

府聴覚障害者協会と京都新聞社会福祉事業団が主催。一般の部には高校生以上の9組12人、子どもの部には13人が出場した。

タクシー会社勤務の井上建紀さんは、東京都の会社で働いていた時、スマホアプリを活用してろう者のタクシードライバーが活躍していたエピソードを語り、「観光の中心地である京都でも実現したい。世界から訪れるろう者の希望になる」と訴えた。

最優秀賞には、手話でコミュニケーション

を取ってプレーするさん(24)＝亀岡市＝「デフバスケット」に挑戦が輝いた。(伊藤恵) スピーチの入賞者は次た理学療法士西村知紗の皆さん。

最優秀賞 西村知紗▽
優秀賞 島田侑璃奈▽京
都新聞社会福祉事業団賞
中上元幸▽敢闘賞 高
岡やよい

シンポジウム障害のある人の就労支援

(2026年2月23日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・杭泊柏樹

◆障害のある人の就労支援シンポ◆

シンポジウム「障害のある人の就労支援」が15日、京都市中京区のハートピア京都で開かれた。地域が連携して事業所の成長につながる道筋を、幅広い層の人たちが探った。就労希望者とのマッチングや柔軟な雇用面で、地域に根ざした中小企業の果たす役割が浮き上がった。

共生社会の実現をめざして京都新聞社会福祉事業団が主催し、16回目を迎えた。2人による講演とグループ交流会に分けて行われた。

「安心して働き続けられるための環境づくり」職場定着向上への実践」とテーマに、産業廃棄物の収集・運搬やペットボトルの再資源化などに取り組む「クリーンスペース」代表取締役の橋本味永子さんが講演した。



①「障害のある人の就労支援」をテーマに催されたシンポジウム（京都市中京区、ハートピア京都）

②聞き手からの質問に答える橋本味永子さん（右）と芳賀久和さん



保育士だった橋本さんは、産業廃棄物収集運搬業の会社として設立された同社で2006年から障害者の雇用を始め、22年にはグループホームも始めた。

従業員12人のうち9人に障害があり、職場で「一見とまどうような不思議な行動について」「その人なりの理由やこだわりがある」と具休例を示した上で個性や特性を仕事につなげていることを説明した。同社で働く4人も発言し、プ

個性を生かせる働き方 地域の中小企業で可能

互いに認め合える仲間が力に

中小企業の経営者や就労支援関係者のほか行政、大学関係者ら講演の聞き手約80人がグループに分かれた交流会は、就労継続支援事業所「あむりた」の白濱智美施設長が司会進行を務めた。オーダーメイドの支援やグループホームの役割、時間や日数など異なる柔軟な働き方などについて活発に意見を交わした。

障害者雇用を始めたきっかけ、職場にとつてのメリットとデメリット、今後の課題など各グループから上がった質問に対し、橋本さんと芳賀さんはそれぞれマイクを握って答えた。2人の「いいいな口ぶりからは「地域が連携して就労の輪を広げよう」との共感がにじんできた。」

(秋元太一)

「地域の中小企業はがんばっています」と、芳賀さんは結んだ。

みんなで海釣り-障害のある人の体験講座

(2025年9月29日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・杭泊樹

◆ みんなで海釣り — 障害のある人の体験講座 — ◆

「みんなで海釣り-障害のある人の体験講座」(主催・京都新聞社会福祉事業団、神戸新聞厚生事業団)が13、14の両日、宮津市で開かれた。京都、滋賀、兵庫の3府県から介助者を含め56人が参加、ボランティアから114人も加わり、府立海洋高校棧橋で多種類の魚を釣り上げた。同講座は自然の中で伸び伸びと野外活動を楽しんでもらおうと1998年から開かれていた。

13日は、同市の府立青少年海洋センター・マリナーシアで開講式があり、府立海洋高校生が講座(〇)の不思議を聞き、実習などを通じて学んだ岩ガキ、海ごみ、ナマコの3テーマで話した。岩ガキは、実際に経験した採苗器を使った作業や市場に「上場」するまでの流れなどを発表した。海ごみでは泡



主な協力団体は次の通り。
【後援】京都府、宮津市、宮津市社会福祉協議会、KJCS京都
【協力】日本釣振興会近畿地区支部・京都府支部、全日本釣り団体協議会、京都府磯釣連合会、MFG、GFG、京都府漁業協同組合、訪問看護ステーションふおすたあ伏見
【協賛】アサヒフーズ、がまかつ、東レ・モノフィラメント、ハヤブサ、マルキュー、マルゴ

雨の中で車いす参加者もチャレンジ。カマスを釣り上げた

雨の棧橋、170人が交流 海洋高生ら熱心に介助

泡スチロールやマイクロプラスチックが海洋と生物に与える悪影響を指摘。ナマコは生態や生物的特徴、食餌としての歴史を紹介した。夜には釣りインストラクターの釣り講習があり、魚の釣り方や危険な魚の見分け方、救命用具のつけ方などを学び、本番に備えた。

14日朝には海洋高に移動し、雨の降る中で約50人の海洋高生・教職員に加えボランティアらが釣り道具や仕掛けの準備を整え、参加者は、雨具の上や下にそれぞれ救

釣果上々、歓声上がる

命胴衣をつけて棧橋で竿を並べた。釣果は例年より良く、午前9時の釣り開始時から比較的大きなキジハタやガシラ、チヌなどが次々と釣り上がり、棧橋のあちこちで歓声が上がった。海洋高生と京都府磯釣連合会員らは、参加者の様子や上がる魚の種類に目を配りながら、餌をつけたり、魚を網ですくって針はずすなど介助に取り組んだ。電動車いすに座り雨具をすっぽりかぶって挑戦していた京都市伏見区の土井孝浩さん(40)は何度も参加して慣れた様子。「この程度の雨は気にならない。釣りはやっぱり楽しい」とカマスなどを釣り笑顔だった。山科区から参加の西村幸さん(24)・ちとせさん(62)親子は、ボランティアの手助けで大きなアコウを釣り上げ、重量の部で表彰も。「アジも20匹以上釣れ、釣れた時のわくわく感や手応えがおもしろい」と話した。



街親子で協力して楽しい釣り。形のいいキジハタも上がった(写真は、いずれも14日、宮津市)

全京都障害者総合スポーツ大会

(2025年6月30日付 京都新聞朝刊)

「第45回全京都障害者総合スポーツ大会」が22日、京都市北区の島津アリーナ京都で盛大に開幕した。総合開会式の後、卓球バレー大会が開催され、31チーム241人が参加して熱戦を繰り広げた＝写真。

同大会は、障害のある人たちがスポーツを通じて健康と体力の維持増進を図ることを目的に、京都障害者スポーツ振興会、京都府、京都市、京都新聞社会福祉事業団など9団体が主催している。この日を皮切りに、10月13日までに卓球、水泳、陸上、アーチェリー、ボッチャ、フライングディスクの7競技の大会が府内各地で開かれる。

卓球バレーは、一般、学校、施設の3部門で行われ、施設の部に出場

卓球バレー集中の熱戦

全京都障害者総合スポーツ大会開幕

だより 事業団

した洛南Bチーム（南区）の棚橋弘美さん（64）は、「チームのみんなと協力して楽しい雰囲気でのプレーができました。来年はもっと成長して、また参加したい」と話していた。

各部門の優勝は下記の通り。
一般の部＝西陣工房、学校の部＝鳴滝B、施設の部＝西陣工房B



京都ゆとりスポーツの集い

(2025年10月21日付 京都新聞朝刊)

心の病を抱えている人たちがスポーツを通じて交流する「京都ゆとりスポーツの集い」が10日、京都市左京区の市障害者スポーツセンターで行われ、約120人が参加した＝写真。

精神科の病院やデイケアに通院、通所している人の健康増進や社会参加促進を願い、府内の精神科病院やクリニックでつくる実行委員会と京都新聞社会福祉事業団が共催し、45回目。

昨年まではソフトボール大会を行っていたが、参加者のニーズに応じようと今年から内容を変え、バドミントン、卓球、モルック、スクエアボッチャの4種目の競技を行った。各競技では、好プレーに歓声や拍手が沸き上がっていた。

だより
事業団

4種目で交流沸く

「京都ゆとりスポーツの集い」



今回は7施設が参加し、選手たちは試合を通して交流を深めた。

実行委員会事務局を務めた京都民医連あすかい病院の福田寛さんは「参加者のニーズに応じて今年から競技内容を変えたが、多くの人に参加してもらえてうれしい。患者さん同士が交流する機会となっているので今後も続けていきたい」と話していた。

パラアーティスティックスイミング フェスティバル

(2025年10月13日付 京都新聞朝刊)

技術向上、交流熱心に

パラASフェス、8都府県から110人

だより
事業団

障害のある人となない人がともに演技する「第33回パラアーティスティックスイミングフェスティバル」が5日、京都市左京区の市障害者スポーツセンターで行われた＝写真。

フェスティバルは日本パラアーティスティックスイミング協会などが主催し、交流と技術向上を目的に開いている。

今回は京都をはじめ、宮城や東京、石川、愛知、兵庫など8都府県から8歳～80代の計約110人が参加し、13団体がソロやデュエット、チームなど5種目に分かれ28演技を行った。

チームの部では、障害のある人となない人が音楽に合わせて足を水面から垂直に上げる動作や、列や輪になるなど、



さまざまな隊形を演じた。

参加者は日頃の練習の成果を発揮し、華麗な演技を披露した。観覧席からは演技が終わるごとに拍手が送られた。

印象深かった演技に贈られるナイスパフォーマンス賞には、ソロの部で辻本千紘さん（京都府）、デュエットの部で三島知香さん・池谷雅江さん（同）、チームIの部でスマイリーサン（東京都）が選ばれた。



◆高齢者のための事業

少子高齢化が進む中、高齢者が安心して暮らせる社会の実現に向けた支援が求められています。当事業団では、高齢者の生活を支えるため、外出機会の創出、介護用車椅子の贈呈、在宅福祉支援など、さまざまな事業を行っています。

◇助成事業

在宅高齢者福祉サービス支援「ホームヘルプサービス活動に関する備品助成」.... 10頁
(12月)

在宅高齢者へのホームヘルプサービスを行う非営利団体に対し、福祉・介護用品の購入費を助成

「高齢者へのプレゼント」贈呈(2月)..... 11頁

特別養護老人ホームへ介助用車いすを贈呈

◇催 事

「京都新聞おでかけ公演・高齢者団体」(3月で2カ所)..... 11頁

高齢者施設に演奏家らを派遣する出張型公演事業 高齢者施設と障害者施設で開催

ホームヘルプサービス活動に関する備品助成 (2026年1月19日付 京都新聞朝刊)

京都新聞社会福祉事業団はこのほど、高齢者の在宅福祉サービスを行う非営利の団体や事業所を対象にした「ホームヘルプサービス活動に関する備品助成」で19団体(京都市1、京都府14、滋賀県4)に総額137万7503円を贈呈した。

同事業は、在宅高齢者への福祉サービスの充実を目的に、介護用品や福祉用具などの購入費を10万円を上限に助成している。助成金は、移乗シートや非接触型体温計、血圧計、使い捨て手袋などに充てられる。

助成先は次のとおり。

H O P E 300宇治憩の家事業所(京都市伏見区)、福知山市社会福祉協議会訪問介護事業所(福知山市)、綾部市社会福祉協議会訪問介護事業所(綾部市)、亀岡市社会福祉協議会

19
団
体
に
助
成
金
贈
呈
在宅
介
護
の
質
向
上
へ



ホームヘルプセンター(亀岡市)、長岡京市社会福祉協議会きりしま苑(長岡京市)、藪々、京丹後市社会福祉協議会久美浜支所(以上、京丹後市)、南丹市社会福祉協議会ほほえみ八木訪問介護事業所、南丹市社会福祉協議会ほほえみかぐら訪問介護事業所(以上、南丹市)、木津川市社会福祉協議会ケアセンターハッピーコスモス(木津川市)、大山崎町社会福祉協議会(京都府大山崎町)、京丹波町社会福祉協議会ヘルパーセンターほほえみ(京丹波町)、北星会与謝の園訪問介護事業所、与謝野町社会福祉協議会介護事業所、丹後福祉応援団訪問介護事業所(以上、与謝野町)、近江八幡市社会福祉協議会ヘルパーステーションあづち(近江八幡市)、栗東市社会福祉協議会訪問介護事業所(栗東市)、甲賀市社会福祉協議会ヘルパーステーションこうか(甲賀市)、日野町社会福祉協議会ホームヘルパーステーションひだまり(滋賀県日野町)

高齢者へプレゼント

(2026年3月9日付 京都新聞朝刊)

京都新聞社会福祉事業団は、「高齢者へのプレゼント事業」として京都府、滋賀県内の特別養護老人ホーム7施設に介助用車いすを各1台贈呈した＝写真。2008年度から毎年実施し、贈呈数は306台となった。

企業や団体からの本紙「記念日おめでとうコーナー」や高齢者事業協賛寄付金などを原資にしている。

車いすは、背もたれと座面角度が調整できるティルト・リクライニング介助型と、ひじ置きと脚部が動かせる多機能介助型の2種類から選択。

前者を選択したこぶしの里サテライト今宮（京都市北区）では、試乗した佐原隆さん（89）が「新しい車いすの乗り心地は最高」と感想を述

高齢者へのプレゼント事業

介助用車いすを贈呈



べ、施設長の服部裕美さん（47）は「気持ちが前向きになれて、趣味の短歌や俳句に励まれています」と話した。

他の贈呈先は次の通り。

洛西（西京区）、京都指月あさがおの郷（伏見区）、京都八勝館（八幡市）、真野しょうぶ苑（大津市）、第二邂逅の郷（彦根市）、治田の里（栗東市）

だより 事業団

利用者を楽しませたバイオリンとファゴットの奏者2人による演奏会（守山市十二里町、もりやま作業所）



京都フィルのメンバー2人

作業所で演奏妙技 守山

京都フィルハーモニー室内合奏団のメンバー・デュオ演奏会」で、12人による「おでかけ公演」が、守山市十二里町のもりやま作業所で行われた。バイオリンとファゴットの森本真裕美さんとファゴットの田中裕美さんが出演した。モーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」やバッハの「G線上のアリア」をはじめ

め、唱歌や歌謡曲のメドレーを披露した。楽器の紹介もあり、参加者はじっくりと聴き入ったり、手拍子を合わせたりして、楽しいひとときを過ごした。（目下田貴政）

め、唱歌や歌謡曲のメドレーを披露した。楽器の紹介もあり、参加者はじっくりと聴き入ったり、手拍子を合わせたりして、楽しいひとときを過ごした。（目下田貴政）

(2026年3月6日付 京都新聞朝刊)

京都新聞おでかけ公演



◆子どもたちのための事業

子どもたちの健全な成長と明るい未来を支えるため、当事業団では多彩な活動を展開しています。児童養護施設へのレクリエーション支援や卒業お祝い金の贈呈、交通遺児への支援、親子で楽しめる子どもシアターの開催など、子どもたち一人ひとりの笑顔と希望を育む取り組みを行っています。これらの活動を通じて、子どもたちが安心して学び、遊び、成長できる環境づくりに努めています。

◇助成事業

- 「児童養護施設の子どもたちのレクリエーション」助成（9月～翌年3月） 12頁
京都・滋賀の全児童養護施設に対し、レクリエーション活動を助成
- 「児童養護施設の子どもたちへの卒業お祝い金」贈呈（3月） 13頁
中学・高校の卒業とともに京滋の児童養護施設を巣立つ子どもたちに「卒業祝い金」を贈呈
- 「交通遺児の子どもたちへの卒業お祝い金」贈呈（3月） 13頁
交通遺児で小学校・中学・高校を卒業する子どもたちに「卒業祝い」として図書カードを贈呈

◇催 事

- 「京都新聞お楽しみ子どもシアター in 京都/in 滋賀」（8月） 13頁
京都・滋賀で人形劇などの公演を開催し、子どもたちを招待

児童養護施設レクリエーション（2026年4月20日付 京都新聞朝刊）

「かいゆうかんにいきました。かんらん車にのりました。こわかったけど楽しかった」

2025年度「児童養護施設レクリエーション」に参加した子どもたちから感謝の気持ちのこもった寄せ書きが届いた＝写真。

同事業は、京都新聞社会福祉事業団が京都、滋賀の全17児童養護施設で暮らす子どもを対象に1人2700円と引率費用1施設2万円を助成し、25年度は570人の子どもたちが参加した。

舞鶴学園（舞鶴市）でともに暮らす小中高生らが、1泊2日で大阪を訪れ、水族館や大観覧車、温泉などを楽しんだという。引率した職員は「大阪では『山がない』『ビルがい

児童養護施設レク助成
子どもたちが笑顔に

事業団
だより



っばい』と目をきらきらさせる子どもたちの笑顔を見ることができ、思い出に残る楽しい旅行ができました」と語った。

助成は、京都ゴルフ倶楽部（京都市北区）と同事業団の共催で開催した児童養護施設の子どもたちのための「チャリティーゴルフ大会」での参加者や企業からの善意を主に、個人からの寄付金を活用している。

児童養護施設の子どもたちへの卒業お祝い金
交通遺児の子どもたちへの卒業お祝い金
(2026年3月17日付 京都新聞朝刊)

卒業おめでとう 施設巣立つ52人に祝い金

卒業シーズンを迎え、京都新聞社会福祉事業団は、京都府、滋賀県内の16の児童養護施設を巣立つ中学生2人、高校生50人に「卒業お祝い金」として総額204万円を贈った。

お祝い金は「児童養護施設の子どもたちのために」と寄せられた善意をもとに、中学生に1人2万円、高校生に同4万円を贈呈している。高校生5人が卒業する京都市東山区の平安養育院（水野



正美施設長)では、同事業団の白石真古人常務理事が「大切に役立ててください」と代表生徒に手渡した一写真。

卒業生は「好きな英語を生かし、客室乗務員(C

A)を目指している。大学では留学も考えており、そのためバイトも頑張ります」と夢を語った。

また、小中高校を卒業する京都、滋賀の交通遺児に「卒業お祝い」として、図書カードを小学生5人(1人5千円分)、中学生8人(同7千円分)、高校生8人(同1万円分)の計21人に京都府や京都市、おりづる会(滋賀県)を通じて贈った。交通遺児のために寄せられた寄付を活用している。



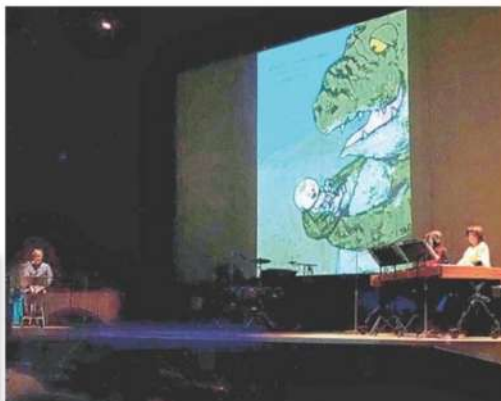
京都新聞お楽しみ子どもシアター
こどもミュージックアドベンチャー
(2025年8月25日付 京都新聞朝刊)



会場とパフォーマンスで盛り上がったコンサート
(守山市三宅町・守山市民ホール)

音楽と舞踊、朗読の催し「こどもミュージックアドベンチャー」が24日、守山市の守山市民ホールで開かれ、市民ホールで開かれ、

音楽や踊り、朗読楽しむ
守山で催し 京滋の子どもら招待



朗読とマリimba演奏による音楽物語
「かいじゅうのすむしま」

京都新聞社会福祉事業団と守山市文化体育振興事業団の共催。打楽器・マリimba奏者の宮本安子さんと、打楽器奏者やダンサー、朗読の「仲間たち」が舞台上で演奏と踊りを繰り広げた。さらに、会場と一体となって打楽器とダンスのパフォーマンスをつくり上げ、盛り上がった。

物語の世界に引き込まれていた。
(岩本敏朗)



◆子育て応援事業

子どもたちの健やかな成長と、子育て中の保護者を支えるため、当事業団では二つの助成事業を実施しています。

◇助成事業

「子育て仲間を応援」助成（7月） 15頁

子育て中の保護者が交流し支え合うサークルや支援グループを対象に、1団体2万円を助成。2025年度は74団体に総額148万円を贈呈しました。2005年度に開始して以来、情報交換や交流の場を支援しており、少人数グループにも助成する独自の制度として好評を得ています。

「子育て事業助成」助成（7月） 15頁

京都・滋賀で子育て支援を行う非営利団体を対象に、講演会や学習会、イベントなどの事業に対し、1団体あたり15万円を上限に助成。2025年度は23団体から応募があり、子ども向けキャンプや文化体験事業、親子で楽しむミュージカル、お話会や音楽会、映画上映会、人形劇など、計13事業に83万8000円を助成しました。



子育て仲間を応援助成・子育て事業助成

(2025年5月26日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・杭迫柏樹

子育て応援事業

京都新聞社会福祉事業団は毎年、京都府、滋賀県で工夫を凝らして子育てに取り組むグループに助成する「子育て仲間を応援」と、催しなどを支える「子育て事業助成」を行っている。2024年度はこんな支援を行った。

京都市南区を拠点に活動する団体「空き家バンク京都子ども食堂」は昨年8月、京都市下京区の「ひと・まち交流館京都」で、文化体験事業として京都フィルハーモニー室内合奏団のメンバーを招いたコンサートを開いた。「子育て事業助成」は会場費や出演者費用などの一部に充てられ、未就園児や小学生の親子など約100人が参加し、昼食弁当も配布した。

担当した井上久美さん(40)は



京田辺市内で開かれた舞台「親子deミュージカル」に、鑑賞した親子も大喜びだった(2024年12月)

提供

「抱負を抱いてほしい」と今後への抱負を抱いてい

子どもを対象に音楽や美術で次世代育成活動を行っている京田辺市のグループ「family arm」は、昨年12月、同市内で幼児から小学生など子育て中の親子を対象にした「親子deミュージカル」を開いた。生で歌や楽器演奏を楽しんでもらおう

「私たちは普段は食を中心にした子育て支援活動を行っています。今回はプロの演奏を聴き、バイオリンなどの楽器にもじかに触れることができる貴重な体験でした。このような支援が得られれば、親子で楽しんでもらえ、豊かな経験となるような事業を、続けてい

という舞台で、約70人が鑑賞した。メンバーの一人、大谷智子さん(54)は「助成支援金は会場費やチラシ費用、出演など協力を受けたグループの謝金などに役立った。母親も楽しめる舞台となり、リフレッシュできた」と声が多く寄せられた。今後も機会があれば

親子で音楽に親しむ 充実した催しの一助に

育児中のリフレッシュにも 今年度申請30日まで

同じような舞台を企画したい」と話している。

「仲間を応援」助成を受けた団体「梅津・北梅津地域子育てサロン」は、右京区の梅津児童館と梅津北児童館を会場に、幼児と母親の心身のリフレッシュと楽しみを目的にした催し「ちよっと来てみませんか」を隔月で合計6回開いた。代表の梅谷理江さん(46)は「助成金はチラシやポスター制作費と講師の礼金の一部に充て役立ちました。合計で90人ほど参加していたとき、リズム遊びや体操などで親子ともに心身をほぐしてもらい、笑顔で帰ってもらうなど充実した催しになりました」と手ごたえを語っている。

同じく「仲間を応援」助成を得た京都市伏見区のグループ「ひとつながり」は、代表の酒井美夢さん(40)の家を主な会場に、乳幼児など子育て中の母親を支援する催し「ママの居場所づくり」を月に2回ほど合計20回余り開き、延べ約90人が参加した。酒井さんは「私自身も母親の立場でうちとけて、おしゃべりしながら互いの思いを共有し、ひと思つける場所にできたのがよかった。今後も継続していきたい」と言う。

24年度は「子育て仲間を応援」で80団体(京都市内15、府内34、滋賀県内31)に一律2万円総額160万円を、「子育て事業助成」で15万円を上限に計13事業(市内4、府内4、県内5)に総額83万5千円を助成した。25年度の申請は30日まで受け付けている。

6

福祉活動
支援



◆福祉活動支援事業

地域福祉の充実を図るため、当事業団では多様な福祉活動を支援しています。

「京都新聞福祉活動支援」助成（2～3月）..... 17頁

京都・滋賀の福祉施設や団体を対象に、「運営支援」と「設備支援」の2部門で助成を行い、地域福祉の向上を目指します。支援対象は、障害のある人、高齢者、子ども、難病患者、生活困窮者の支援に取り組む団体など幅広く、1団体あたり30万円を上限に助成します。選考委員会では、地域福祉への貢献度、事業の推進力、期待される成果などを基準に審査し、助成先を決定します。

2025年度は、京都の企業から「高齢者のために役立ててほしい」と300万円の寄付を受け、高齢者支援団体や当事者団体3団体に各100万円を贈呈する特別枠を設けました。これにより、当初の助成額400万円と合わせ、総額700万円の助成を実施しました。

（※2025年度から、助成予算総額を400万円に、1団体あたりの上限助成額を30万円にしています）

京都新聞オーシャン号贈呈事業 贈呈式
2025年9月10日付 京都新聞朝刊



福祉車両8台 京滋8団体に贈呈

京都新聞社福事業団 貿易商社会長寄付基に



オーシャン貿易の米田会長（右から2人目）からの寄付を受け、社会福祉法人などに寄贈された福祉車両。京都市南区・京都日産自動車南店

京都新聞社会福祉事業団（京都市中京区）は9日、貿易商社オーシャン貿易（同区）の米田多智夫会長から受けた寄付を基に購入した福祉車両8台の贈呈式を、京都日産自動車南店（南区）で行った。就労支援事業所や児童福祉施設などで、利用者の送迎などに役立てられる。米田会長は昨年、地

域福祉や若者支援に役立ててほしいと個人で5千万円を寄付した。同事業団は基金を創設し、3千万円で8台の車両を購入。オーシャン号と名付け、選考を経て、障害者や高齢者、児童の支援に取り組む京都と滋賀の計8団体への寄贈を決めた。

贈呈式で米田会長は「地域の皆さんの生活のお役にたてれば幸いです」と願いを語った。寄贈を受けた団体の代表者たちは「通所者の自宅送迎に役立てたい」「仲間たちに出かける楽しさを味わってもらいたい」と喜んでいた。

以前に寄付を受けた1台を含めオーシャン号は計9台となった。寄付の残りの2千万円は同事業団の給付型の奨学金事業に活用する。（近藤大介）

京都新聞福祉活動支援助成

(2026年4月6日付 京都新聞朝刊)

ともに生
きる

京都新聞社会福祉事業団だより

京都新聞福祉事業団は、京都、滋賀両府県の福祉施設やボランティアグループなどの活動を支援する2025年度「京都新聞福祉活動支援」事業の贈呈式をこのほど、京都市中京区のハートピア京都で行った。写真。

1団体当たり上限30万円までを助成する運営、設備両部門と高齢

京滋28団体に700万円

者の支援団体や当事者団体を対象に100万円を3団体に助成する特別枠で申請を受け付けた。運営13団体（申請22団体）に計182万円、設備12団体（同14団体）に計218万円、特別枠3団体（同3団体）に計300万円、計28団体に総額700万円を助成。高齢者や難病患者、子どものための支援

地域福祉活動に役立てて 助成金贈る

団体や障害のある人のために活動するボランティアグループの活動費、子ども食堂や障害者施設の設備品の購入などに支援した。

助成団体は、次の通り。

【特別枠】

京都ケアラーネット（京都市北区）、認知症の人と家族の会（上京区）、ハンド&ネイルケアボランティアチームガンチー（左京区）

【運営部門】

自閉症eサービス@京都・滋賀（京

都市上京区）、つるかめ笑顔クラブ

（同）、京都府網膜色素変性症協会（中京区）、お客様がいらっしやいました・（下京区）、京都障害福祉デジタル化推進協会（左京区）、助けあいグループりぼん（東山区）、京都YMCA長岡こおろぎ（西京区）、ジョイント西京視覚障害者ボランティア（同）、京よりそい（宇治市）、『くらしの応援隊』ボランティアの会（長岡京市）、おうさか高齢者フレイルケアの会（大津市）、異才ネットワーク（同）、元気づずみーオ放課後等デイサービスげんき（草津市）

【設備部門】

西陣工房（京都市北区）、障害者芸術推進研究機構（同）、京都犯罪被害者支援センター（上京区）、チャイルドライン京都（山科区）、洛西寮朗読ボランティアサークル（西京区）、ありがとう（伏見区）、あまつこども食堂（同）、チェリー工房（城陽市）、向日市点訳サークル「きつつき」（向日市）、バスハウス（長岡京市）、滋賀県母子福祉のぞみ会（大津市）、あじっこ（米原市）



7
顕彰



◆京都新聞福祉賞・福祉奨励賞

(贈呈式1月) 18～19頁

京都府および滋賀県において、地域福祉の向上に著しい功績のあった個人または団体を対象に「京都新聞福祉賞」を、また、活動歴10年未満の若い団体等で、今後の活躍が期待される個人または団体を対象に「京都新聞福祉奨励賞」を贈り、顕彰しています。

本事業は、1965年の事業団設立と同時に「京都新聞社会福祉功労者表彰」として開始し、今年で61年目を迎えます。2024年度に迎えた設立60周年を機に、京都新聞との連名主催とし、京都新聞グループ全体で支える体制へと発展させ、実施しております。

贈呈額は、福祉賞が個人20万円、団体30万円、奨励賞は個人・団体ともに10万円です。推薦は新聞紙面等を通じて公募し、選考委員会において決定します。これまでに個人192件、団体78件、計270件(2025年度時点)を表彰してきました。

2025年度は、福祉賞2団体・福祉奨励賞2団体に贈呈をしました。



京都新聞福祉賞・京都新聞福祉奨励賞 贈呈式

(2026年1月27日付 京都新聞朝刊)

「新たなつながりで前を」

京都新聞福祉・奨励賞贈呈式

社会福祉の向上に貢献した団体や個人を表彰する「京都新聞福祉賞」と、将来のリーダーとして期待される若い世代に贈る「京都新聞福祉奨励賞」の贈呈式が26日、京都市中京区のハートピア京都であった。福祉賞2団体、奨励賞2団体の功績をたたえた。

今年度の福祉賞は、心臓病の子を持つ親が交流する「全国心臓病の子どもを守る会京都支部」（上京区）と、摂食障害を抱える人の自助グループ「あかりプロジェクト関西」（舞鶴市）が選ばれた。

福祉奨励賞は、京都市大生らで続けることも食堂「からふる」（左京区）、働く大人を小学生が取材し「子ども新聞」を発行する「i note+P」（伏見区）に贈られた。式では、同業団理事長の太西祐資・京都新聞社長が「当事者に寄り添い、安心と希望を与えた」とたたえ、賞状を手渡した。受賞スピーチで、全国心臓病の子どもを守る会の石神彩乃支部長（51）は「リアルな人間関係を敬遠する風潮で、つながりを求めても一歩を踏み出せない人がいる。心強く温かな場所があると知って新たにつながり、前を向く人が増えていくと信じている」と述べた。

（田中恒輝）



京都新聞福祉賞の表彰を受ける全国心臓病の子どもを守る会京都支部の石神支部長（左）
京都市中京区・ハートピア京都 撮影・三木千絵



公益財団法人 京都新聞社会福祉事業団

京都市中京区烏丸通二条上ル蒔絵屋町260

京都新聞トラストビル 4階

TEL 075 (241) 6186 / FAX 075 (222) 2515



ホームページ
が新しくなりました



X公式アカウントを
フォローしよう



電子決済による
寄付受付をはじめました